海を見た日

鳥羽東中学校 三年
上村 彩佳

ほら、また来るぞ
父の声に私はふり向く
テレビで見たことのある水の泡が
音をたてて私に突っ込んでくる
初めて海というものを見たあの春
波はとても高く感じた
これが海なんだ
広く青い水の世界が眩しかった
水飛沫が足元を濡らす
痛いくらいに冷たい水
海を見た日
私はここに越して来た
まだ潮の香という言葉さえ知らなかった

ほら、また来るよ
弟は海に走り出した
いつも見ている水の泡が
音をたてて弟に突っ込む

ここに来て八年目の夏
波は今だに高く感じる
そうか
そうか、これが海なんだ
いつも見ている風景が眩しい
波打ち際に立ってみる
あの頃と同じ冷たい水
海を去る時
私は深く溜め息を吐いた
今日も潮の香が鼻腔に滑り込んでくる
きれいだね
私は小さく呟く
きれいだよ
弟は大きく叫んだ
そうだ、これが海なんだ
いつ来たって海は眩しい
弟の手がスッと伸びてきた
私はそれを握り締める
どこかで波と波がぶつかった

第11回「海の香りのする詩」市内中学生の部で大賞に選ばれた上村さんの作品です。
海が少しずつ自分の生活の一部になってきている様子を、家族との温かく自然なやり取りの中で表現しています。背景の絵も上村さんに描いていただきました。（関連記事を12ページに掲載しています）